

2. 各植生毎の保全管理手法の検討

本緑地の自然環境の特性を踏まえた保全管理を行うために、各植生毎にその資源性や問題点を整理し、ゾーン毎の環境目標にむけての管理手法を示す。

なお、各植生毎のシートに示されている植生の番号や植生調査地点は、本資料編2頁の植生区分図に対応している。

各シートの植生調査地点・高さ・主な植物・出現数・植生調査地点の現況写真は、特に説明がない場合、「鎌倉市自然環境調査」（平成15年3月）に基づく。

基本計画策定にあたり、植生調査を実施したところ、植生調査地点3は当初のオギ群落からカナムグラ群落に推移していることが確認された。したがって、オギ群落のシートには植生調査地点を示さず、本緑地で確認されたオギ群落のデータとして掲載する。

管理手法（案）の参考文献

「雑木林の植生管理・その生態と共生の技術」ソフトサイエンス社
「河川環境と水辺植物・植生の保全と管理」ソフトサイエンス社
「エコパーク・生き物のいる公園づくり」ソフトサイエンス社
「森づくりテキストブック・市民による里山林・人工林管理マニュアル」山と溪谷社
「広葉樹林整備指針・生活保全森林ゾーン・資源活用森林ゾーン編」神奈川県
「市民による里山林整備指針・生活保全森林ゾーン編」神奈川県
「水源の森林づくり広葉樹林整備マニュアル・水源かん養エリア編」神奈川県

他

○ 植生シートの目次

No.1	ヤブコウジースダジイ群集	28
No.2	ハンノキ群落	29
No.3	スダジイーコナラ群落	33
No.4	オニシバリーコナラ群集	34
No.5	ミズキ群落	35
No.6	ミズキ群落イノデ下位群落	36
No.7	アカメガシワーカラスザンショウ群落	37
No.8	アズマネザサークズ群落	38
No.9	アズマネザサ群落	39
No.10	カナムグラ群落	40
No.11	路上雑草群落	41
No.12	ヨシ群落	42
No.13	オギ群落	43
No.14	ミゾソバ群落	44
No.15	竹林	45
No.16	スギ・ヒノキ植林	46
No.17	クヌギ植林	47
No.18	マテバシイ植林	48
No.19	ススキ群落	49
No.20	樹木植栽地	
No.21	畑地雑草群落	50
No.22	水田	
No.23	緑の多い住宅地	
No.24	開放水面	

植生管理手法を示す植生対象から除外した植生区分

No.1 ヤブコウジ-スダジイ群集 (常緑広葉樹林)		
植生調査地点	7, 12	
高さ	24m	
主な植物	高木層	スダジイ、アカガシ、アラカシ、ケヤキ、ハゼノキ
	亜高木層	スダジイ、コナラ、タブノキ、モチノキ、ヤブツバキ
	低木層	ヒサカキ、アオキ、ヤブツバキ、ニセジュズネノキ
	草本層	ニセジュズネノキ、アオキ、アカガシ、オオイタチシダ、テイカカズラ、ベニシダ、ナガバジャノヒゲ
出現種数	35	
概要	関東地方の低地に分布する、スダジイの優占する常緑広葉樹自然林。鎌倉市周辺では神社や丘陵地の尾根部～斜面下部、平坦地～急斜面地のやや乾燥しやすい立地に分布し、本緑地付近では丘陵尾根部や基岩の露出した急峻斜面等に断片的に残存している。アカガシ等の混生する、高さが 25m 内外の大型のスダジイ高木林で、高木層から草本層まで 4 階層から成り、各層において常緑植物が優占する。本緑地付近では希少な自然林であると共に、最も高木層の発達した樹林であり、ニセジュズネノキ等他の植物群落には見られない種群も生育する、重要な森林である。	
調査地内における分布	頂部緩斜面、上部谷壁斜面の乾性立地に断片的に残存するのみ。 【分布するゾーン】 源流の森と里山の保全ゾーン 里山の保全ゾーン 里山再生ゾーン 景観緑地と里山の保全ゾーン	
資源性	【植生の見所・魅力】：特になし 【動物の生息環境の特性】：特になし	
問題点	大半の林分は森林面積が過小で固有の種組成を維持しがたい。	

管理手法	
スダジイの優先する自然林として保全を図る。	
源流の森と里山の保全ゾーン	巡視管理（ツル切り等） 水源涵養力の高い下層植生の発達した複層林として保全を図る。
里山の保全ゾーン	巡視管理（ツル切り等）
里山再生ゾーン	巡視管理（ツル切り等）
景観緑地と里山の保全ゾーン	巡視管理（ツル切り等） 安定した斜面樹林として保全する。

巡視管理：月 1 回程度及び台風通過後等必要に応じて、巡回。蔓の絡みつき、病虫害の多発、風倒木の発生等植生維持上問題となる変化につき監視し、適宜対応策を講じる。

ツル切り：樹木に巻きつき生長を阻害するフジやアケビ、樹冠を覆い尽くし樹木を衰弱させるクズなどのツル植物を対象として 1 回 / 年程度、根元を伐採する。

【現況写真】



植生調査地点 7

No.2 ハンノキ群落 (落葉広葉樹林)		
植生調査地点	10、19	
高さ	20m	
主な植物	高木層	ハンノキが優占
	亜高木層	-
	低木層	アオキ、イヌツゲ、ノイバラ
	草本層	ドジョウツナギ、ハンゲショウ、ミゾソバ、セリ、アゼナルコスゲ
出現種数	30.5	
概要	高木層にハンノキが優占するヤブツバキクラス域の湿生林。台峯の谷戸、谷底湿地の水田放棄地に小面積で分布し、谷戸の池上流側の林分が最もまとまりがあり、構成種にもミゾソバ、ハンゲショウなどの水生・湿生植物が多種類見られる。なお、植生調査地点 No.19 のハンノキ林は既に乾燥化が進行して、アオキやアズマネザサが繁茂しつつある。	
調査地における分布	【分布するゾーン】 源流の森と里山の保全ゾーン（源流域の湿地保全エリア最奥部、ため池上流部） 源流の森と里山の保全ゾーン（里山の湿地保全エリア）	
資源性	【植生の見所・魅力】： 鎌倉に残るハンノキ林として重要であり、湿地の代表的な植生景観となる。 【動物の生息環境の特性】： 冬鳥、昆虫食の鳥類、キツツキ類、爬虫類、ゲンジボタル、ヘイケボタルなどが高密度で確認された。多くの指標にとって重要な環境であると考えられる。 （鎌倉市自然環境調査より） ハビタットとしてよく利用する生物：ヤマカガシ、オオタカ・フクロウ、シジュウカラ、メジロ、アオジ（冬鳥）、ノウサギ、タヌキ、イタチ ハビタットとして特に必要な生物：カシラダカ（冬鳥）（鎌倉市自然環境調査より）	
問題点	源流域の湿地保全エリア（最奥部）：林床にはアオキやアズマネザサが繁茂し、乾燥化が進行しているとみられる。 源流域の湿地保全エリア（ため池上流部）：ため池上流側の特徴的なハンノキ群落については、ため池に近い林床部に、セリ・ハンゲショウ等の生育が見られる。 里山の湿地保全エリア：面積狭小。ため池下流側に見られるハンノキ群落については一部に衰えが見られる。	

管理手法	
源流の森と里山の保全ゾーン（源流域の湿地保全エリア最上流部）	林床のアオキ・アズマネザサの下刈り等により、乾燥化を抑制し、適切な林床植生への誘導を図る。覆いかぶさる傾斜木の枝払い、伐採やツル切り、立入禁止等の措置を検討する。
源流の森と里山の保全ゾーン（源流域の湿地保全エリアため池上流部）	ハンノキ林の健全な生育環境を保全。覆いかぶさる傾斜木の枝払い、伐採やツル切り、立入禁止等の措置を検討する。定期的なモニタリングと状況に応じた対応。
源流の森と里山の保全ゾーン（里山の湿地保全エリア）	ハンノキやその実生を保護（坪刈り等）して、ハンノキ・ヨシ群落等のモザイク化した湿地の保全を図る。定期的なモニタリングと状況に応じた対応。

【現況写真】



植生調査地点 10



植生調査地点 19

〔鎌倉市におけるハンノキ林〕（鎌倉市自然環境調査より）

ハンノキ林は鎌倉では、休耕田の跡地などのように湧水の流れる谷底や池沼の周りの土がとても湿ったところに生育するが、鎌倉市内にはこのような環境はもともと少ないため、貴重な植生とされており、鎌倉市自然環境調査における市内 22 地区の調査地の中では本緑地にのみ確認されている。

【ハンノキの特性】（参考）

種名：ハンノキ（*Alnus japonica* stand）

分類：カバノキ科ハンノキ属

分布：北海道、本州、四国、九州、沖縄、南千島、ウスリ一、朝鮮、中国、台湾

生育地：低湿地や湿原。地下水位の高いところに生える。

備考：幹の皮目から空気を地下部に送る機構があり、木のまわりに水がたまったりすると、不定根や萌芽が発生する。これらは水分の過剰なところでも生育できるように適応したメカニズムである。

出典：「樹に咲く花 離弁花」（山と溪谷社）



写真 根元からの萌芽

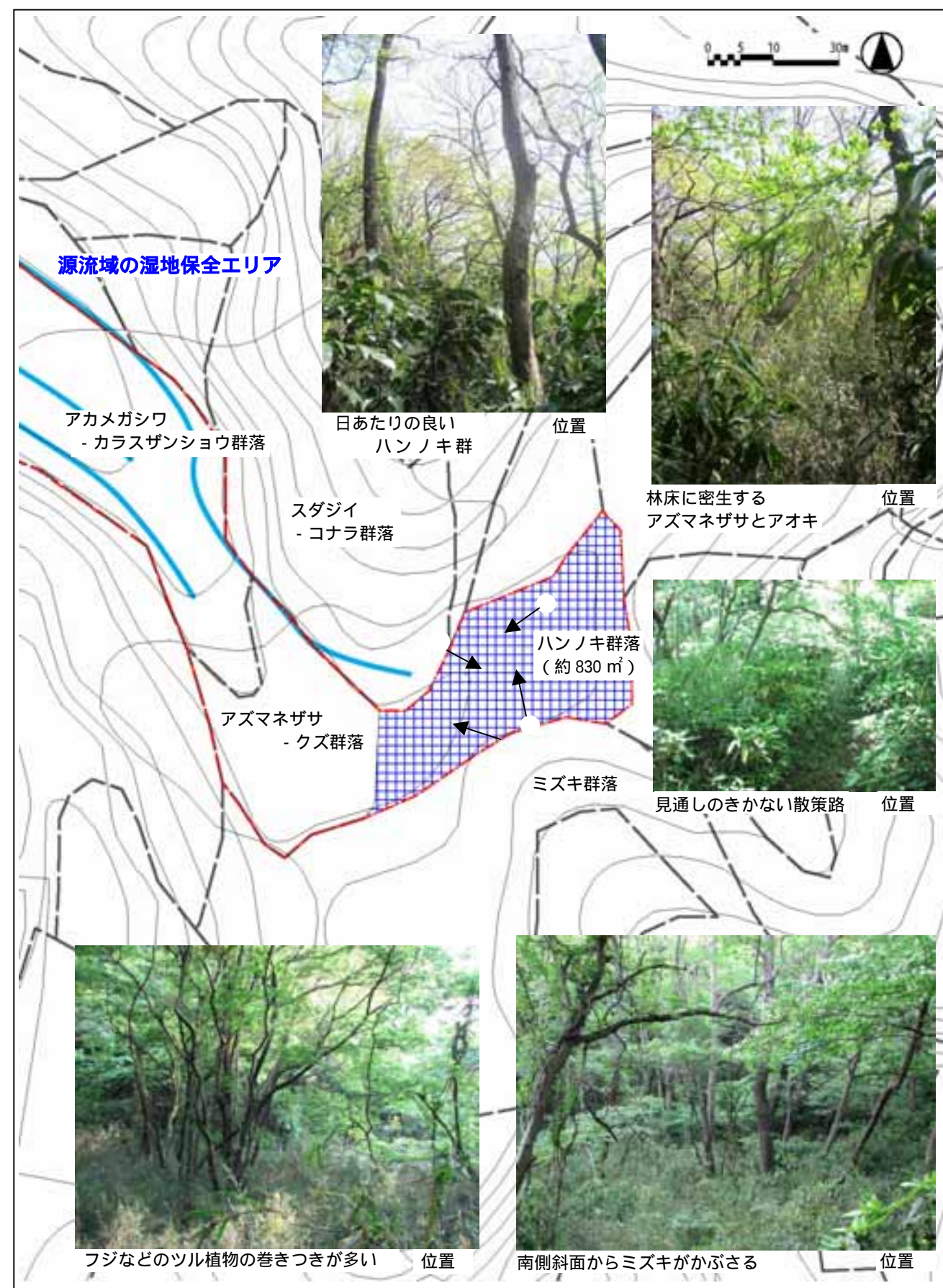


図 台峯の谷戸（最奥部）のハンノキ群落の状況

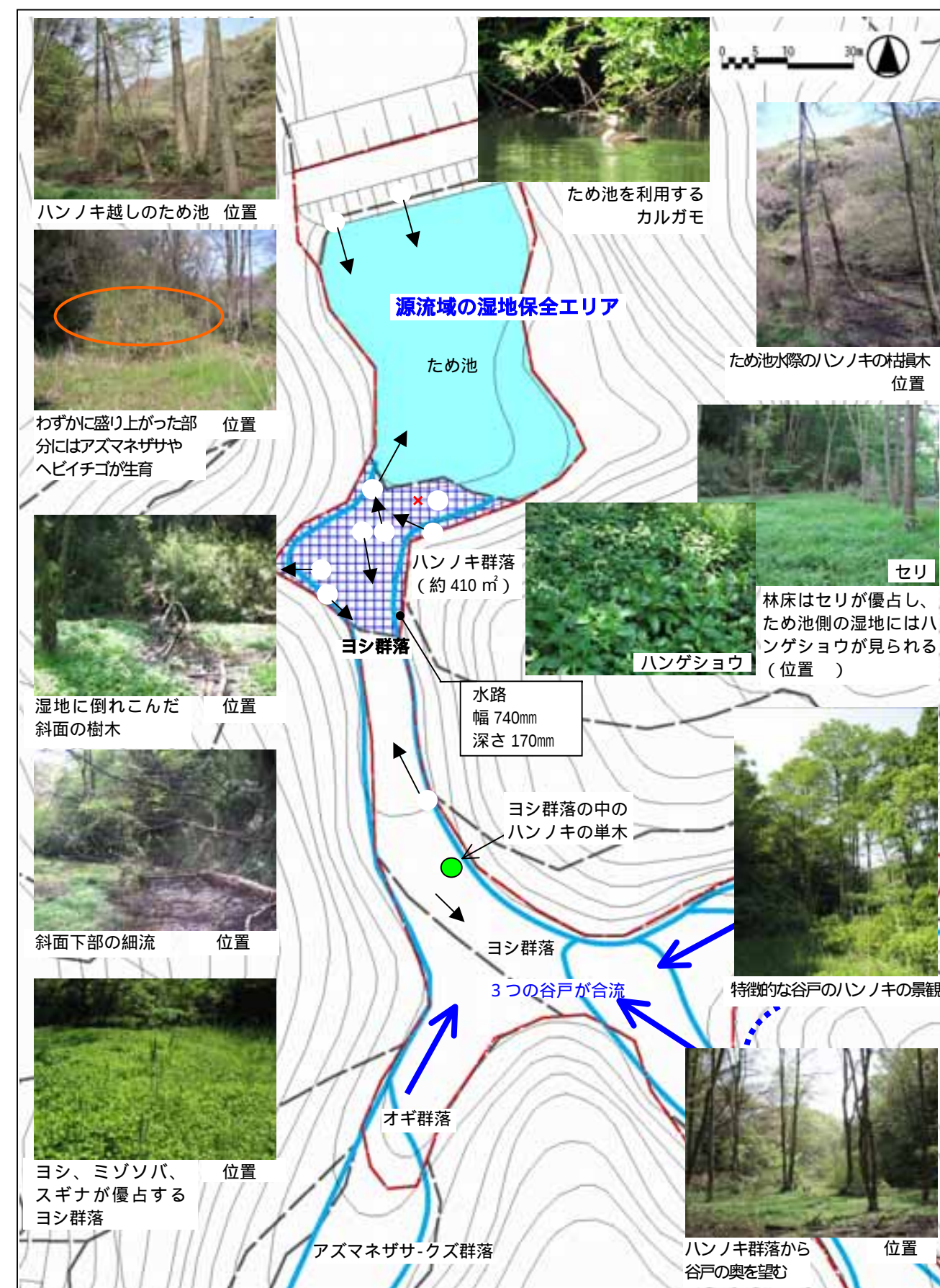
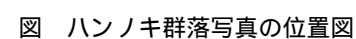


図 源流域の湿地保全エリアの状況

その後、ため池流出部にブロックで堰を設けることにより、ため池の水位を上げたり、ため池流入部に沈砂池を設けたり、水路に土嚢を積んで湿地の乾燥化を防ぐ等、様々なエコアップ作業が行われたことにより、現在の湿地環境に至ったものと考えられる。

	ハンノキ群落の状況	湿地環境の傾向
昭和 56 年頃 (26 年前)	ハンノキの後継樹が見られる。	ヨシが見られる。
平成 4 年頃 (15 年前)	ハンノキの立木密度が低下し、後継樹も見られない。	林床には、ヘビイチゴが一面に咲いており、やや乾燥化した傾向が見られる。
平成 19 年 (現在)	ハンノキの立木密度に変化はなく、後継樹も見られない。	様々なエコアップ作業が行われたことにより、林床には、水辺や湿地に生育するハンゲショウやセリ等が見られる。



A black and white photograph of a forest path. The path is covered in fallen leaves and branches, leading into a dense stand of tall, thin trees. The foreground is filled with low-lying vegetation and branches.

A photograph showing a sun-dappled forest floor. The ground is covered in a thick layer of green grass and low-lying vegetation. Long, dark shadows of trees are cast across the grass from the left side. Several tree trunks are visible in the background, and the overall scene is bright and lush.



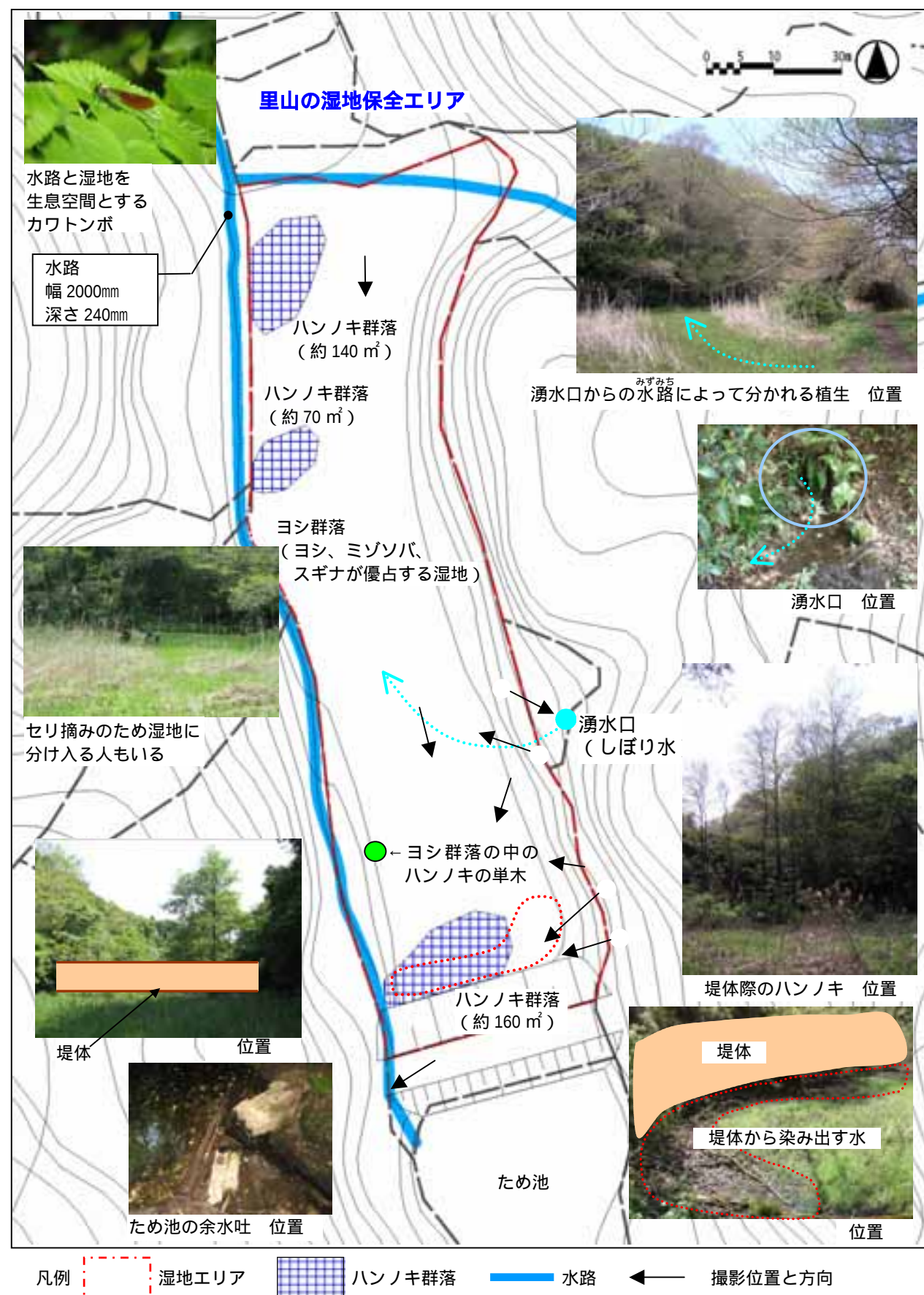
A photograph of a forest floor. The ground is covered with a thick layer of fallen leaves and branches. Several trees are standing in the background, and a large, fallen tree trunk lies across the foreground. The scene is dimly lit, suggesting an overcast day or a dense canopy.

A photograph of a forest clearing. The foreground is filled with tall, green grass and some low-lying plants. Several trees with thin trunks are scattered throughout the clearing, with a denser forest in the background. The lighting is bright, suggesting a sunny day.

A photograph of a lush green forest. In the foreground, there are dense, vibrant green bushes and trees. The middle ground shows a clearing with more trees and a small, dark structure or shed. The background is filled with tall, slender trees reaching towards a bright, slightly overcast sky. The overall scene is a dense, healthy woodland.

平成 19 年 5 月のハンノキ群落の状況 (位置)

1



昭和 56 年頃のハンノキの状況 (位置)
(写真提供: 川上氏 (地元在住))

平成 19 年 1 月のハンノキの状況 (位置)

写真 ため池下流のハンノキ群落の経年変化

No.3 スダジイ - コナラ群落 (常緑・落葉樹混交林)		
植生調査地点	8	
高さ	21m	
主な植物	高木層	スダジイ、コナラ
	亜高木層	エゴノキ、スダジイ
	低木層	ヒサカキ、アオキ、アズマネザサ、
	草本層	アズマネザサ、キツタ、ベニシダ、オオイタチシダ
出現種数	32	
概要	スダジイとコナラが混交する常緑・落葉樹混交林。オニシバリ - コナラ群落が発達し、潜在自然植生のヤブコウジ - スダジイ群集へと遷移中の林分。林床はヤブコウジ - スダジイ群集と同様、常緑植物が優占し、コナラ林の面影は失われている。	
調査地内における分布	調査地内における分布：比較的南斜面に多く見られる。 【分布するゾーン】 源流の森と里山の保全ゾーン 里山の保全ゾーン 里山再生ゾーン 景観緑地と里山の保全ゾーン	
資源性	【植生の見所・魅力】：特になし 【動物の生息環境の特性】：特になし	
問題点	特になし	

管理手法	
スダジイの優先する自然林へと自然遷移に任せて誘導する。	
源流の森と里山の保全ゾーン	ヤブコウジ - スダジイ群集等と連続した樹林として自然遷移に任せて誘導を図る。水源涵養力の高い下層植生の発達した複層林として保全を図る。クズ・フジ・アケビ類等のツル切り、侵入竹の除伐。
里山の保全ゾーン	巡視管理（ツル切り、除伐等）
里山再生ゾーン	巡視管理（ツル切り、除伐等）
景観緑地と里山の保全ゾーン	隣接するヤブコウジ - スダジイ群集と連続した樹林として自然遷移に任せて誘導を図る。クズ・フジ・アケビ類等のツル切り、侵入竹の除伐と倒木の除去。

巡視管理：月 1 回程度及び台風通過後等必要に応じて、巡回。蔓の絡みつき、病虫害の多発、風倒木の発生等植生維持上問題となる変化につき監視し、適宜対応策を講じる。

ツル切り：樹木に巻きつき生長を阻害するフジやアケビ、樹冠を覆い尽くし樹木を衰弱させるクズなどのツル植物を対象として 1 回 / 年程度、根元を伐採する。

【現況写真】



植生調査地点 8

No.4 オニシバリ - コナラ群集 (落葉広葉樹林)		
植生調査地点	2、11、15、16	
高さ	18.3mm	
主な植物	高木層	コナラ、イヌシデ、ヤマザクラ、スダジイ、ハリギリ、
	亜高木層	クマシデ、イヌシデ、ゴンズイ、コナラ、ムラサキシキブ、スダジイ
	低木層	アズマネザサ、スダジイ、ヒサカキ、アオキ、イヌビワ、ヤマツツジ、トベラ
	草本層	アズマネザサ、テイカカズラ、ナガバジャノヒゲ、エビネ
出現種数	38	
概要	コナラ、イヌシデの優占する、薪炭林起源の落葉広葉樹二次林。薪炭の供給源として利用された二次林で、定期的な下刈りなどの維持管理と、10～15年ごとの皆伐・萌芽更新等が行われるコナラ林であったと考えられる。薪炭林施業が行われていた時期には生育していたと想定される夏緑生、半常緑生植物はほとんど見られずヤブコウジ - スダジイ群集と同様、アズマネザサ、スダジイ、アオキ、ヒサカキ等の常緑の種の被度が高く、林床も常緑広葉樹の実生、常緑生の草本植物の常在度が高い。同じ落葉広葉樹二次林のミズキ群落とはミズキ、ムクノキ、エノキ、ケヤキ、キチジョウソウ等で識別される。	
調査地内における分布	ヤブコウジ - スダジイ群集の分布域と一致する。頂部斜面～上部谷壁斜面に生育。イヌシデの被度の高い林分は急傾斜地の谷壁に多く分布する。 【分布するゾーン】 源流の森と里山の保全ゾーン 里山の保全ゾーン 里山再生ゾーン 景観緑地と里山の保全ゾーン	
資源性	【植生の見所・魅力】： シラヤマギク、アキノキリンソウ、スミレ類、アキノタムラソウ、ヤマハッカ、ナルコユリ、ヤマツツジ、コウヤボウキ等の夏緑生、半常緑生植物草花の潜在立地 【動物の生息環境の特性】： 面積がとても大きく、多くの指標が普通に利用している環境であると考えられ、特別ではないが、緑地の基盤として存在する環境だと考えられる。（鎌倉市自然環境調査より） ハビタットとしてよく利用する生物：セミ類、モンキアゲハ、ヤマアカガエル、シュレーゲルアオガエル、オオタカ・フクロウ、ウグイス、シジュウカラ、メジロ、ノウサギ、タイワンリス、タヌキ、イタチ （鎌倉市自然環境調査より）	
問題点	利用や管理がなされなくなったため、低木層や草本層にスダジイ林などに生育する常緑植物が増え、草本層にアズマネザサなどが繁茂し、林床の植物相が貧困になっている。	

管理手法	
1) ヤブコウジ・スダジイ群集を目指した管理【遷移誘導型】：巡視管理等に止めることで、スダジイの優占する自然林へと自然遷移にまかせて誘導。 2) オニシバリ・コナラ群集を目指した管理【基本型】：低木層に繁茂した常緑樹の間伐を行い、晩秋～冬季の下刈りを実施することにより、本来のコナラ林に近い姿を取り戻し、シラヤマギク、アキノキリンソウ、スミレ類等、花の美しい植物が林床を彩ようになる。 3) オニシバリ・コナラ群集を目指した管理【里山型】：10～15年周期で広さ10a単位を目安に皆伐し、萌芽更新を促す。皆伐後は基本型の管理の他、萌芽枝が発生してきた3～6年後には、切り株から萌芽してきた枝を間引くもやかきなどを行う必要がある。	
源流の森と里山の保全ゾーン	【遷移誘導型】巡視管理（スダジイ林等への遷移誘導、水源涵養林として下層植生の発達した複層林化）。 【基本型】里山の保全ゾーン隣接地：間伐、下刈り・落ち葉かき。
里山の保全ゾーン	【基本型】間伐、下刈り・落ち葉かき。 【里山型】里山再生ゾーン隣接地（部分）：皆伐・萌芽更新＋下刈り・落ち葉かき。
里山再生ゾーン	【里山型】皆伐・萌芽更新＋下刈り・落ち葉かき。
景観緑地と里山の保全ゾーン	【遷移誘導型】倒木等の除去。その後は巡視管理（スダジイ林等への遷移誘導）。 【基本型】里山の保全ゾーンに隣接するアクセスの良い緩傾斜地：間伐、下刈り・落ち葉かき。

【現況写真】



植生調査地点 2



植生調査地点 11



植生調査地点 15



植生調査地点 16

No.5 ミズキ群落 (落葉広葉樹林)		
植生調査地点	1	
高さ	15m～	
主な植物	高木層	ミズキ、イヌシデ、カラスザンショウ、エゴノキ
	亜高木層	-
	低木層	アズマネザサ、アオキ、シロダモ、ムラサキシキブ
	草本層	アズマネザサ、アオキ、キツタ、ナガバジャノヒゲ、テイカカズラ
出現種数	40	
概要	ミズキが優占し、コナラをほとんど欠く落葉広葉樹林。林床はコナラ林同様、アズマネザサが繁茂し、林内に夏緑植物が少なく常緑植物が優占する等類似している。崖崩れ、地滑り跡地、かつての耕作放棄、コナラ林の更新失敗地等にも成立する。本緑地内では清水谷戸、台峯の谷戸上流部等の谷壁下部から斜面中腹までに見られ、将来的に斜面上部はスダジイ林に、下部はシロダモ - タブノキ林に遷移する。	
調査地内における分布	頂部斜面～下部谷壁斜面の急傾斜地に分布。 【分布するゾーン】 源流の森と里山の保全ゾーン 里山再生ゾーン 里山再生ゾーン（水田・湿地再生エリア） 景観緑地と里山の保全ゾーン	
資源性	【植生の見所・魅力】：特になし 【動物の生息環境の特性】：特になし	
問題点	ほとんど放置されているため、鳥に種子を運ばれて発芽したアオキや、アズマネザサなどが低木層に繁茂して林床の植物相を貧困にしている。特にアオキの異常な繁茂は、他の植物の生育を阻害するだけでなく、見た目にも見苦しい。	

管理手法	
林冠のあいた林分や、クズ群落に隣接する林分では、森林の荒廃を防ぐため、ツル切りなどの管理が必要である。アオキやアズマネザサの生育を伐採や刈り取りなどにより制限すれば、個体数の少ないエビネやその他のラン科植物に生育地を与え、林縁にみられる花の美しい草本類も、林内に導くこともできる。しかし、現状のような低木層の密な林分をシェルターとする小動物もあるから、管理の集約度の異なる林分を目的に応じて配置する必要がある。	
源流の森と里山の保全ゾーン	スダジイ林、タブノキ林への発達を見越した巡視管理。特にツル切りの実施。
里山再生ゾーン	緩傾斜地：下刈り・ツル切りによる林床植物の多様化。 その他：巡視管理。
里山再生ゾーン （水田・湿地再生エリア）	下刈り・ツル切りによる林床植物の多様化。
景観緑地と里山の保全ゾーン	傾きやすく倒れることにより急峻斜面の崩壊を招く恐れがあるため、傾斜木の伐採とスダジイ林、タブノキ林への発達を見越した巡視管理。

【現況写真】



植生調査地点 1

No.6 ミズキ群落 イノデ下位群落 (落葉広葉樹林)		
植生調査地点	20	
高さ	20m	
主な植物	高木層	ミズキ、ケヤキ、キツタ、エノキ
	亜高木層	イヌビワ、エゴノキ、ミズキ
	低木層	アオキ、アズマネザサ
	草本層	アズマネザサ、アオキ、キツタ、イワガネソウ、リョウメンシダ
出現種数	42.2	
概要	適潤からやや湿潤な谷頭凹地、下部谷壁斜面凹状地。崩積斜面に成立するミズキ二次林（潜在自然植生はイノデ - タブノキ群集）。台峯付近では主に台峯の谷戸の上流部に分布。高木層にはケヤキ、エノキが混生し、林床は優占するアズマネザサ、アオキの下にイノデ類、イワガネソウ、リョウメンシダ等のタブノキ林を構成するシダ植物が特徴的に見られる。	
調査地内における分布	【分布するゾーン】 源流の森と里山の保全ゾーン	
資源性)	【植生の見所・魅力】：特になし 【動物の生息環境の特性】：特になし	
問題点	特になし	

管理手法	
タブノキ林への移行を見越した巡視管理。特にツル切りの実施。	
源流の森と里山の保全ゾーン	同上

【現況写真】



植生調査地点 20

No.7 アカメガシワ - カラスザンショウ群落 (落葉広葉樹低木～亜高木林)		
植生調査地点	13	
高さ	4m～	
主な植物	高木層	(カラスザンショウ、アカメガシワ)
	亜高木層	-
	低木層	カラスザンショウ、アカメガシワ、クサギ、アズマネザサ、キブシ、ヌルデ、ヤマグワ、アオキ
	草本層	テイカカズラ、ナキリスゲ、ケスゲ、アズマネザサ
出現種数	39	
概要	伐採・倒木跡地や耕作地跡等に成立する先駆性陽樹の低木～亜高木林。台峯の谷戸上流部等の谷壁斜面や谷底に分布。林冠は先駆性陽樹の夏緑広葉樹であるカラスザンショウ、アカメガシワ、クサギ等が覆い、林床はアズマネザサが密生する。ミズキ林を経て斜面上部でスダジイ林へ、下部でシロダモ - タブノキ林へと遷移する。	
調査地内における分布	台峯の谷戸奥などの耕作地跡や、崩積斜面や頂部緩斜面にみられた。 【分布するゾーン】 源流の森と里山の保全ゾーン 源流の森と里山の保全ゾーン（源流域の湿地保全エリア） 里山の保全ゾーン 里山再生ゾーン 景観緑地と里山の保全ゾーン	
資源性	【植生の見所・魅力】：特になし 【動物の生息環境の特性】： 谷底面の草地と斜面林の境界に分布している箇所は、水辺に生息する「ゲンジボタル」に好適な環境であると考えられる。（鎌倉市自然環境調査より） ハピタットとしてよく利用する生物：セミ類、モンキアゲハ、フクロウ・オオタカ、コゲラ、ウグイス、シジュウカラ、メジロ、ノウサギ、タイワンリス、タヌキ、イタチ （鎌倉市自然環境調査より）	
問題点	クズ、フジ等のツル植物が過繁茂する場合があります、周辺林を含め偏向遷移に至る場合があります。カラスザンショウは生長早く、倒伏し易い。	

管理手法	
ツル切りなどを行う巡視管理にとどめた場合、アカメガシワ - カラスザンショウ高木林・ミズキ高木林へと発達する。ただし、カラスザンショウは老化すると倒伏による災害の危険があるので、巡視時に樹勢低下の兆候が見られれば、伐採もやむを得ない。	
源流の森と里山の保全ゾーン	巡視管理により適正な植生遷移を妨げるツル過繁茂の防止を図る。
源流の森と里山の保全ゾーン （源流域の湿地保全エリア）	巡視管理により適正な植生遷移を妨げるツル過繁茂の防止を図る。また、湿地環境の連続性を確保するため、ゲンジボタルの生育・生息環境に配慮し、部分的な間伐等の措置を検討する。
里山の保全ゾーン	（竹林の裾に極小面積）
里山再生ゾーン	北端に伐採跡地起源の低木林として分布する他、谷底に小面積で見られる。巡視管理により適正な植生遷移を妨げるツル過繁茂の防止を図る。
景観緑地と里山の保全ゾーン	南部の畑跡地下方、伐採跡地に低木林から亜高木林として分布。巡視管理により適正な植生遷移を妨げるツル過繁茂の防止を図る。

【現況写真】



植生調査地点 13

No.8 アズマネザサ - クズ群落 (ツル低木マント群落)		
植生調査地点	-	
高さ	2m ~	
主な植物	高木層	-
	亜高木層	-
	低木層	アズマネザサ、クズ
	草本層	オニドコロ、フジ
出現種数	-	
概要	暖温帯域の伐採跡地や畑の耕作放棄地等に成立する二次性のツルササ群落。クズ群落のようなツル植物を主体とする植生はもともと、林縁にあってマント群落と呼ばれる。しかし、森林が荒廃して上層の植被率が低くなると、林内に侵入してその面積を拡大する。また、畑地や果樹園などが放棄された後にも侵入する。	
調査地内における分布	林縁部や畑地の周辺、畑の耕作放棄地など、多くは小面積ではあるが、至る所にみられた。鎌倉市では火山灰の堆積した頂部緩斜面～谷底の、岩礫地や過湿地を除く広範な立地に成立。 【分布するゾーン】 源流の森と里山の保全ゾーン 里山の保全ゾーン 里山再生ゾーン 景観緑地と里山の保全ゾーン	
資源性	【植生の見所・魅力】：特になし 【動物の生息環境の特性】： ハビタットとしてよく利用する生物：クロマドボタル、カナヘビ、シジウカラ、メジロ、アオジ(冬鳥)、ノウサギ、タイワンリス、タヌキ、イタチ ハビタットとして特に必要な生物：ヒカゲチョウ、ウグイス(鎌倉市自然環境調査より)	
問題点	クズ群落は広い面積で発生すると、クズの旺盛な成長力で、隣接した植生を荒廃させるようになる。上層を覆って下層の植物の生育を阻害するため、容易に他の群落に移行しない(偏向遷移)など、問題が多い。	

管理手法	
クズ群落は、偏向遷移により高木林化を阻害し、周辺森林へも悪影響を及ぼすことから、その群落の状態や目的に合わせて他の群落への移行を図ることが望ましい。下層に木本種が多い場合には、頻繁にツル切りを行い、森林への移行を促すことができる。もっぱら草本植物で構成される場合には、その目的に応じて、年 1 回、晩秋から冬にかけての刈り取りにより、高茎草地(ススキ等)に、年 2 ~3 回、夏季から秋季にかけての刈り取りにより、低茎草地(ヨモギ等)へと移行させることができる。ただし、クズ密生群落として長年月を経た地点では除草剤の併用無しに刈り取りによるクズ撲滅は困難(ツル切り・刈り取りの継続)。 なお、刈り払いを行う場所や頻度を具体的に検討するにあたっては、林縁部などは残したり刈り取りをローテーションで行うなど野鳥等の生息環境に配慮する必要がある。また、風が抜けて湿地の乾燥化を招く要因にならないよう場所の刈り取り方法に配慮する必要がある。	
源流の森と里山の保全ゾーン	木本植物マーキング→夏季：木本を極力残して全刈り→ツル切りの実施による木本群落の育成。源流域の湿地保全エリアにおいては、湿生環境の連続性を考慮した刈払い等を行う。
里山の保全ゾーン	谷底部に帯状に分布：同上または全刈りによる草地化
里山再生ゾーン	ツル切りの実施による過繁茂・周辺影響の防止
景観緑地と里山の保全ゾーン	ツル切りの実施による過繁茂・周辺影響の防止

【現況写真】



No.9 アズマネザサ群落		
植生調査地点	5	
高さ	3.5m	
主な植物	高木層	-
	亜高木層	-
	低木層	アズマネザサ、オニドコロ、ネムノキ、ヒメコウゾ
	草本層	ジャノヒゲ、ホシダ、ドクダミ、ヤブマメ、ハナタデ
出現種数	16	
概要	アズマネザサ-クズ群落と同様の立地にみられる二次笹原で、アズマネザサの密生により、共存種はツル植物や強耐陰性種に限られる。耕作地などが放棄されると、多年生草本群落から先駆性の低木林、やがては高木林へと遷移していくのが普通だが、こうした土地にアズマネザサが繁茂すると、植被率が極端に高いため、他の植物が侵入することができなくなり、植物種の多様性の低いアズマネザサ群落の状態が長く続くことがある。	
調査地内における分布	人家や耕作地の周辺や、耕作放棄地を中心に、大小の植分が多数みられた。 【分布するゾーン】 源流の森と里山の保全ゾーン 源流の森と里山の保全ゾーン（源流域の湿地保全エリア） 里山の保全ゾーン 里山の保全ゾーン（里山の湿地再生エリア） 里山再生ゾーン 景観緑地と里山の保全ゾーン	
資源性	【植生の見所・魅力】： アズマネザサは、昔から境栽や防風垣などのほか、ツル植物栽培の補助材や冬季の防風などの農用資材、ざるなど、様々な用途に利用されてきた。 【動物の生息環境の特性】： ハビタットとしてよく利用する生物：ヒガシカワトンボ、オオシオカラトンボ、ゲンジボタル、ヘイケボタル、クロマドボタル、モンキアゲハ、カナヘビ、ヤマカガシ、オオタカ、フクロウ、シジュウカラ、メジロ、カシラダカ（冬鳥）、アオジ（冬鳥）、ノウサギ、タイワンリス、タヌキ、イタチ ハビタットとして特に必要な生物：ヒカゲチョウ、ウグイス（鎌倉市自然環境調査より）	
問題点	クズ群落のように他の植生を侵食することはないが、植生遷移の進行は遅延する。アズマネザサ以外には、ツル植物等がみられる程度の多様性の低い群落である。	

管理手法	
年1回、晩秋から冬にかけての刈り取りにより高茎草地（ススキ等）に、年2～3回、夏季から秋季にかけての刈り取りにより低茎草地（ヨモギ等）へと移行させることができる。また、先駆性の低木類を含む群落であれば、アズマネザサの繁茂を抑制することにより、樹林への発達を促すこともできる。 なお、刈り払いを行う場所や頻度を具体的に検討するにあたっては、林縁部などは残したり刈り取りをローテーションで行うなど野鳥等の生息環境に配慮する必要がある。また、風が抜けて湿地の乾燥化を招く要因にならないよう場所の刈り取り方法に配慮する必要がある。	
源流の森と里山の保全ゾーン	基本的に樹林地に接した小面積帯状の分布であり、南東部尾根沿いの植分を除いて遷移に委ねる。南東部については畑跡の緩斜面にあり、生物多様性の維持・増進のために初期整備として全刈り、低木伐採、搬出後、低茎草地（ヨモギ等）等による多様な草地への再生を図る。
源流の森と里山の保全ゾーン（源流域の湿地保全エリア）	堤体の密生群落であり、隔年程度の刈り払いにより群落の若返りを図る。
里山の保全ゾーン	段差のある緩傾斜地（グラウンド下）にあり、緩斜面では刈り取りにより低茎草地（ヨモギ等）等による多様な草地へ、崖線部はツル切り・既存樹木廻りの刈り払いにより低木林化を図る
里山の保全ゾーン（里山の湿地再生エリア）	倉久保の谷戸の上流側の狭隘部に分布：刈り取りにより低茎草地（ヨモギ等）等の再生を図り、多様な草地として保全を図る。
里山再生ゾーン	いずれも頂部緩斜面の畑跡地にあり、農作物や苗木等の畑として活用を図り、その他は、生物多様性の維持・増進のために刈り取りの頻度により草土手や一部の平場を低茎草地（ヨモギ等）に再生する。北東端コナラ林間の笹原については補植等により雑木林化。
景観緑地と里山の保全ゾーン	いずれも頂部緩斜面の畑跡地にあり、生物多様性の維持・増進のために刈り取りにより高茎草地（ススキ等）等の多様な草地のほか苗木等の畑としての利用など多面的な活用を図る。

【現況写真】



植生調査地点 5

No.10 カナムグラ群落 (1 年生ツル群落)		
植生調査地点	-	
高さ	0.7m	
主な植物	高木層	-
	亜高木層	-
	低木層	-
	草本層	カナムグラ、オギ、ウシハコベ、オオブタクサ、ツルマメ、カキドオシ
出現種数	16.0	
概要	カナムグラが優占する 1 年生つる植物群落。夏季に最盛期を持つ。頂部～谷底の平坦面に多い。水田・畑地放棄の富栄養な適潤地に生育。	
調査地内における分布	【分布するゾーン】 源流の森と里山の保全ゾーン 里山の保全ゾーン 里山の保全ゾーン（里山の湿地再生エリア）	
資源性	【植生の見所・魅力】 ：特になし 【動物の生息環境の特性】 ：特になし	
問題点	谷底部の多湿立地においてオギ群落を衰退させながら拡大中、谷底部の生物多様性を損なっている。	

管理手法	
谷底湿地：5 月下旬～6 月：カナムグラ発芽・展葉初期に摘み取り、 9 月以降：花序の切除により繁茂防止。繁茂の状況により全刈りも検討。 畑跡地：初夏と盛夏の 2 回刈りにより低茎草地（ヨモギ等）の形成。	
源流の森と里山の保全ゾーン	隣接する植生への影響を考慮して、上記の谷底湿地と同等の管理を行う。
里山の保全ゾーン	初期整備：全刈り、低木伐採、搬出 年間管理：畑跡地（上記参照）
里山の保全ゾーン （里山の湿地再生エリア）	谷底湿地：上記参照 水路から水を引くなどの水環境の改善により、ヨシ・ミゾソバ～オギなど湿性植物がモザイク状に生育する多様な湿地環境の再生が可能となる。

【現況写真】



No.11 路上雑草群落		
植生調査地点	-	
高さ	0.3m	
主な植物	高木層	-
	亜高木層	-
	低木層	-
	草本層	カゼクサ、コヌカグサ、アキメヒシバ、クサイ
出現種数	16.0	
概要	低茎多年草草本植物群落。富栄養な適潤地。低地、山地の乾性で日照条件の良い路上に生育。一定の踏圧下で持続群落を形成している。踏圧がやや弱まるとススキクラスの大型多年生草原などに遷移する。	
調査地内における分布	山崎子供会館入口や日当入口などに分布する。 【分布するゾーン】 源流の森と里山の保全ゾーン 里山の保全ゾーン	
資源性	【植生の見所・魅力】： コメヒシバ、ニワホコリなど、こうした立地のみ生育する植物が見られる。また、ハハコグサ、トキワハゼ、イヌコウジュなど、小型の草花がみられる。 【動物の生息環境の特性】： 種子食の鳥類、すべてのチョウ類、草地性及び樹林性の昆虫類、トンボ類など多様な生物が生息し多くの指標にとって重要な環境であると考えられる。 (鎌倉市自然環境調査より) ハビタットとしてよく利用する生物：ショウリョウバッタ、カナヘビ、アオジ(冬鳥)、モグラ、ノウサギ、タイワンリス、タヌキ、イタチ (鎌倉市自然環境調査より)	
問題点	特になし	

管理手法	
踏圧や草刈りが継続されれば、現在の状態が維持される。放置すれば、低茎草地(ヨモギ等)を経て、高茎草地(ススキ等)化する可能性がある。	
源流の森と里山の保全ゾーン	南端、頂部平坦面に分布：草刈りによる草地維持または作業ヤードとして活用等。
里山の保全ゾーン	北端、谷底平坦面に分布：作業ヤードとしての活用等。

【現況写真】



No.12 ヨシ群落		
植生調査地点	18	
高さ	2m	
主な植物	高木層	-
	亜高木層	-
	低木層	-
	草本層	ヨシ、ミゾソバ、ツルマメ、セリ、スギナ、エゾノサヤヌカグサ
出現種数	14	
概要	台峯の谷戸の水田放棄地起源の谷底湿地に成立したヨシ原。地表はしばしば停滞水に覆われ、泥質。地下水位の変動がなければ群落は持続する。ヨシとミゾソバが優占し、エゾノサヤヌカグサ、コシロネ、シロバナサクラタデ等他地点では見られない湿生植物も多い。谷底部の乾燥化とカナムグラの過繁茂が進行中。	
調査地内における分布	【分布するゾーン】 源流の森と里山の保全ゾーン（源流域の湿地保全エリア） 源流の森と里山の保全ゾーン（里山の湿地保全エリア） 里山の保全ゾーン（里山の湿地再生エリア）	
資源性	【植生の見所・魅力】： ミゾソバ、ミソハギ等湿生草花の潜在立地。 【動物の生息環境の特性】： 谷戸の谷底面に水路を伴って分布しており、多くの動物に利用され、両性類、トンボ類、ホタル類と言った水辺の動物が高密度で生息し、在来種の哺乳類や爬虫類、冬鳥がよく利用する環境であると考えられる。また、鳥類以外の貴重種が高密度に確認されるなど、多くの生物にとって貴重な生息空間となっていると考えられる。 （鎌倉市自然環境調査より） ハビタットとしてよく利用する生物：オオシオカラトンボ、キアゲハ、ヤマアカガエル、カナヘビ、ヤマカガシ、ウグイス、シジウカラ、アオジ（冬鳥）、カヤネズミ、タヌキ、イタチ ハビタットとして特に必要な生物：ヒメギス、カシラダカ（冬鳥）、ノウサギ （鎌倉市自然環境調査より）	
問題点	源流域の湿地保全エリア：乾燥化し低木・ツル侵入、地形的に谷が狭く斜面林大型化のため日照不足のため、ヨシ原としては衰退。 里山の湿地保全エリア：乾燥化し低木・ツル侵入、カナムグラ等が増加中で将来的には衰退の恐れ有り。 里山の湿地再生エリア：乾燥化が進行しつつあり、将来的には衰退の恐れ有り。隣接地で発生したカナムグラが侵入してヨシの衰弱する箇所が見られる。	

管理手法	
現況特性と各ゾーンの基本方針を考慮して適切な保全を図る。	
源流の森と里山の保全ゾーン （源流域の湿地保全エリア）	ヨシ群落の保全を図ることを基本とし、水分条件の違いによる多様な湿性植物が生育できるような湿地環境として保全を図る。踏み固められることによる陸地化を防止するため、立入禁止等の措置を検討する。
源流の森と里山の保全ゾーン （里山の湿地保全エリア）	面的にまとまったヨシ原として維持保全を図る。カヤネズミ等注目種の生息生育環境の保全に配慮した適切な保全管理を行う。踏み固められることによる陸地化を防止するため、立入禁止等の措置を検討する。（なお、ハンノキが散在する湿地環境保全のため、坪刈りによりハンノキの実生を保護する。）
里山の保全ゾーン （里山の湿地再生エリア）	水路引き込みにより、過湿環境維持し、カナムグラ実生摘み取り、その他ツル植物切除によりヨシ湿原として維持し、隣接植生のミゾソバ群落、オギ群落等とともに低草～高茎の湿性植物がモザイク状に生育する多様な湿地環境を形成。

【現況写真】



植生調査地点 18

No.13 オギ群落		
植生調査地点	3	
高さ	2.5m	
主な植物	高木層	-
	亜高木層	-
	低木層	-
	草本層	オギ、カナムグラ、フジ、アケビ、ドクダミ
出現種数	12.5	
概要	台峯の谷戸の水田放棄地で、多湿の谷底湿に分布。	
調査地内における分布	【分布するゾーン】 源流の森と里山の保全ゾーン（源流域の湿地保全エリア） 里山の保全ゾーン（里山の湿地再生エリア）	
資源性	【植生の見所・魅力】 ：特になし 【動物の生息環境の特性】 ： 谷戸の谷底面に水路を伴って分布しており、多くの動物に利用され、両性類、トンボ類、ホタル類と言った水辺の動物が高密度で生息し、在来種の哺乳類や爬虫類、冬鳥がよく利用する環境であると考えられる。また、鳥類以外の貴重種が高密度に確認されるなど、多くの生物にとって貴重な生息空間となっていると考えられる。 （鎌倉市自然環境調査より） ハビタットとしてよく利用する生物：オオシオカラトンボ、キアゲハ、ヤマアカガエル、カナヘビ、ヤマカガシ、ウグイス、シジュウカラ、アオジ（冬鳥）、カヤネズミ、タヌキ、イタチ ハビタットとして特に必要な生物：ヒメギス、カシラダカ（冬鳥）、ノウサギ （鎌倉市自然環境調査より）	
問題点	富栄養化、水位低下及びカナムグラ過繁茂により面積減少。	

管理手法	
水路管理による水位の低下防止、ツル植物過繁茂の防止によりオギ群落を維持する。特にカナムグラ対策は緊急性高く、群落域内に侵入したカナムグラについても晩春期の摘み取り除去を実施。	
源流の森と里山の保全ゾーン （源流域の湿地保全エリア）	水分条件の違いにより、多様な湿性植物が生育できるような湿地環境として保全を図る。
里山の保全ゾーン （里山の湿地再生エリア）	水路管理による水位の低下防止、ツル植物過繁茂の防止によりオギ群落を維持する。特にカナムグラ対策は緊急性高く、群落域内に侵入したカナムグラについても晩春期の摘み取り除去を実施。

【現況写真】



植生調査地点 3

No.14 ミゾソバ群落		
植生調査地点	-	
高さ	1.1m	
主な植物	高木層	-
	亜高木層	-
	低木層	-
	草本層	ミゾソバ、ヨシ、シロバナサクラタデ、カナムグラ
出現種数	(13.8)	
概要	ミゾソバの優占する 1 年生草本植物群落。水田、排水路、富栄養化した河川の水際などの泥土の堆積地に生育。水田耕作放棄後にミゾソバが繁茂し、ミゾソバが開花する秋季に最盛期となる。群落の繁茂は富栄養化の指標となる。台峯の谷戸の過湿な谷底湿地に分布し、秋季ミゾソバが一斉に開花し、よく目立つ。ヨシ、シロバナサクラタデ、サヤヌカグサ、アキノウナギツカミ、ドジョウツナギ等が生育し、湿生植物の限られた生育地となっている。	
調査地内における分布	【分布するゾーン】 里山の保全ゾーン（里山の湿地再生エリア）	
資源性	【植生の見所・魅力】：ミゾソバ等湿地固有の草花の生育環境 【動物の生息環境の特性】： 谷戸の谷底面に水路を伴って分布しており、多くの動物に利用され、両性類、トンボ類、ホタル類と言った水辺の動物が高密度で生息し、在来種の哺乳類や爬虫類、冬鳥がよく利用する環境であると考えられる。また、鳥類以外の貴重種が高密度に確認されるなど、多くの生物にとって貴重な生息空間となっていると考えられる。 （鎌倉市自然環境調査より） ハビタットとしてよく利用する生物：オオシオカラトンボ、ヤマアカガエル、カナヘビ、ヤマカガシ、カシラダカ（冬鳥）、アオジ（冬鳥）、タヌキ、イタチ ハビタットとして特に必要な生物：ヒメギス、キアゲハ、ノウサギ （鎌倉市自然環境調査より）	
問題点	隣接湿地の現状から見て、富栄養化と水路洗掘に伴う乾燥化により、将来的に衰退の恐れ有り。	

管理手法	
水位低下の影響を受けやすくヨシ群落と同様の扱いで保全。	
里山の保全ゾーン （里山の湿地再生エリア）	水路管理による乾燥防止。巡視を続け、ツル過繁茂は実生摘み取り、ツル切り等により防止。

【現況写真】



No.15 竹林（マダケ・モウソウチク林）		
植生調査地点	9	
高さ	15.8m	
主な植物	高木層	モウソウチク、マダケ
	亜高木層	-
	低木層	アオキ、アオツツラフジ、フジ、ホドイモ
	草本層	アオキ、ドクダミ、ツタ、ハウチャクソウ、ヤブミョウガ
出現種数	31	
概要	高木層にモウソウチク、マダケが密生し、林床植生は未発達。潜在自然植生は斜面上部はスダジイ林、下部はタブノキ林。	
調査地内における分布	丘陵部下端の凹状地。集落では背後の傾斜地に土砂流出防備に兼ねて植栽される。 【分布するゾーン】 源流の森と里山の保全ゾーン 里山の保全ゾーン 里山再生ゾーン 景観緑地と里山の保全ゾーン	
資源性	【植生の見所・魅力】： 薄暗い林床は植被率が低く魅力に乏しいが、適切な管理により美しい竹林の再生が可能。 【動物の生息環境の特性】： ハビタットとしてよく利用する生物：フクロウ・オオタカ、シジュウカラ、メジロ、 タイワンリス、タヌキ（鎌倉市自然環境調査より）	
問題点	モウソウチク林は放置すると地下茎を伸長して周辺植生に侵入・被圧してその面積を拡大する。また、マダケはモウソウチクに比べ桿が細いため密生しやすく、林床の植被率や種組成は貧弱になりがちである。 竹林内に孤立した大径木はいずれも樹勢の衰えがみられ、適切な対策をとらなければいずれ竹林に飲まれてしまうと考えられる。	

管理手法	
毎年秋に 5 年生以上の古竹（または、桿色の黄変しかかったもの）の除伐を行うことにより、竹林をより健全な状態に保つことができる。また、竹林の拡大を防ぐために、周辺地域での春季（3 月下旬～4 月）の筍の除伐、マダケでは初夏（6 月頃）の除伐も欠かせない。 大径木の保全のために、大径木周辺のモウソウチクを除去するとともに、周辺地域同様毎春の除伐作業を行う必要がある。 なお、管理を行う場所や頻度を具体的に検討するにあたっては、手を入れない竹林や何年かおきにローテーションで行う竹林など、野鳥等の生息環境に配慮する必要がある。	
源流の森と里山の保全ゾーン	現況竹林：古竹除伐。周辺に侵入した竹：除伐。
里山の保全ゾーン	
里山再生ゾーン	現況竹林：初期整備として劣勢竹除伐、枯竹除去、古竹間引き。 その後年間で 2 割程度間引き。 周辺に侵入した竹：除伐、 住宅地裏の急峻斜面の竹林など土砂災害防止のために植林されている箇所などは基本的に現況のまま保全。
景観緑地と里山の保全ゾーン	住宅地裏の急峻斜面の竹林など土砂災害防止のために植林されている箇所などは基本的に現況のまま保全。

【現況写真】



植生調査地点 9

No.16 スギ・ヒノキ植林 (常緑針葉樹林)		
植生調査地点	4、6、17 (ヒノキ)	
高さ	20.7m	
主な植物	高木層	スギ、ヒノキ
	亜高木層	ミズキ、シロダモ、ハゼノキ
	低木層	アオキ、シュロ、アズマネザサ、ネズミモチ、ヒサカキ、ムラサキシキブ
	草本層	ベニシダ、オオイタチシダ、ミゾシダ、ムクノキ、エノキ、シロダモ、イノデ類
出現種数	41.7	
概要	スギ・ヒノキが優占する常緑針葉樹林。壮齢植林地では低木層・草本層がよく発達する。調査地では間伐等森林施業が不十分なため、林床が荒れている林分が多い。ヤブツバキクラス域では林床にアオキ、シロダモ、テイカカズラなどの適潤地生の植物が生育。潜在自然植生：斜面上部：スダジイ林。斜面下部：シロダモ・タブノキ林。	
調査地内における分布	スギ植林は斜面下部凹状地。ヒノキ植林は頂部斜面の乾性立地にみられる。集落では背後の傾斜地に土砂流出防備を兼ねて植栽される。 【分布するゾーン】 源流の森と里山の保全ゾーン 里山の保全ゾーン 里山再生ゾーン 景観緑地と里山の保全ゾーン	
資源性	【植生の見所・魅力】： 谷底のスギ植林の林床は、大型のシダ植物が優占して特異な景観を持っている。 【動物の生息環境の特性】： 植林により成立した環境であるが、在来種の哺乳類に良く利用されている環境であると考えられる。（鎌倉市自然環境調査より）	
問題点	間伐の遅れから劣勢樹がみられ、ツル植物の絡みつきも見られる。	

管理手法	
スギ・ヒノキ劣勢樹除伐、ツル切り実施により広葉樹林化を促進。	
間伐等の適正な密度管理により、スギ・ヒノキ林の育成に努めることも可能。	
源流の森と里山の保全ゾーン	劣勢樹除伐、ツル切り実施
里山の保全ゾーン	劣勢樹除伐、ツル切り実施
里山再生ゾーン	初期整備として間伐（径 20φ 以下）、劣勢樹除伐、枯損木除去、スギ優勢樹にかかる広葉樹を除伐する。 その後は必要に応じて、間伐、劣勢樹除伐、枯損木除去、下刈り、ツル切りを行いスギ・ヒノキ林の育成を図る。
景観緑地と里山の保全ゾーン	劣勢樹除伐、ツル切り実施

【現況写真】



植生調査地点 4



植生調査地点 6



植生調査地点 17

No.17 クヌギ植林 (落葉広葉樹林)		
植生調査地点	110	
高さ	16m	
主な植物	高木層	クヌギ、イヌシデ
	亜高木層	クヌギ、キブシ、ハゼノキ
	低木層	アズマネザサ、モミジイチゴ、イヌビワ、クヌギ、ハリギリ
	草本層	アズマネザサ、モミジイチゴ、オオバウマノスズクサ、ヤブラン、ナガバジャノヒゲ、ベニシダ
出現種数	32	
概要	薪炭材として造林されたクヌギ林。低木層にはアズマネザサが密生するほか、モミジイチゴ、イヌビワ等夏緑植物に富む。草本層は低木層に密生するアズマネザサの影響で未発達。関東では通常、谷部の湿生立地に造林されるが、台峯付近では頂部緩斜面。潜在自然植生は頂部緩斜面；スダジイ林	
調査地内における分布	台地、丘陵地の比較的陽性で土壌の厚く堆積した斜面や尾根部。 【分布するゾーン】 源流の森と里山の保全ゾーン 景観緑地と里山の保全ゾーン	
資源性	【植生の見所・魅力】：特になし 【動物の生息環境の特性】：特になし	
問題点	特になし	

管理手法	
ツル切り程度の巡視管理で適正な植生遷移を妨げるツル過繁茂の防止を図る。	
源流の森と里山の保全ゾーン	同上
景観緑地と里山の保全ゾーン	同上

【現況写真】



植生調査地点 110

No.18 マテバシイ植林 (常緑広葉樹林)		
植生調査地点	111	
高さ	18m	
主な植物	高木層	コナラ
	亜高木層	マテバシイ
	低木層	アズマネザサ
	草本層	アズマネザサ、アオキ、イタビカズラ、ジャノヒゲ、シュロ、ツルグミ
出現種数	20.0	
概要	マテバシイが優占する常緑広葉樹植林。ヤブツバキクラス域の丘陵地、平地などの乾性立地。マテバシイは、薪炭材になり、堅果（どんぐり）は救荒作物であった。また、かつて盛んであった東京湾沿岸のノリ養殖用のひびの原木としてもマテバシイが利用されており、利用価値の高い樹種として植栽された。本緑地付近では亜高木層で密生するマテバシイのため、低木層、草本層は未発達で、スダジイ林と共通のイタビカズラ等耐陰性の高い常緑植物が多い。潜在自然植生はスダジイ林ながら、マテバシイ林は天然更新可能なため遷移は著しく遅延。	
調査地内における分布	北部の宅地の南西側斜面と、南西部の谷部の斜面上に小規模な林分がみられた。 【分布するゾーン】 里山再生ゾーン	
資源性	【植生の見所・魅力】： 林床が暗く、マテバシイ以外にはごく耐陰性の強い少数の種がみられるだけの、種組成の極端に貧困な、季節感のない林分ではあるが、かつて海と陸をつないだ文化景観として残していく価値はある。 【動物の生息環境の特性】：特になし	
問題点	マテバシイ林のまま持続し、植生遷移の進行は著しく遅延。	

管理手法	
コナラ薪炭林に準じた、薪炭林施業。材（観察路整備）、どんぐり（食用）の利用。	
里山再生ゾーン	同上

【現況写真】



植生調査地点 111

No.19 ススキ群落		
植生調査地点	-	
高さ	m	
主な植物	高木層	-
	亜高木層	-
	低木層	-
	草本層	ススキ、チガヤ
出現種数	-	
起源	耕作地の放棄後、年に 1 回刈り取りを行う程度の粗放的な管理下で成立した植分と考えられる。	
調査地内における分布	東側尾根部に小規模な植分がみられた。 【分布するゾーン】 景観緑地と里山の保全ゾーン	
資源性	【植生の見所・魅力】： 調査地点のススキ草原は丈が低く、ナンバンギセル（7～9 月）、ネジバナ（4～8 月）など、丈の低い多年草が多い。秋には、草紅葉といわれるチガヤやメリケンカルカヤの紅葉がみられる。ススキ草原は、かつては茅場として維持された、農村地帯に固有の原風景ともいえる。固有の植物相をもち、秋の七草などはいずれもススキ草原の構成種であった。 【動物の生息環境の特性】： 種子食の鳥類、すべてのチョウ類、草地性及び樹林性の昆虫類、トンボ類など多様な生物が生息し多くの指標にとって重要な環境であると考えられる。（鎌倉市自然環境調査より）	
問題点	特になし	

管理手法	
ススキ草原としての景観や種組成を維持するのであれば、晩秋から冬にかけての時期に年 1 回の刈り取りを行う必要がある。ススキ草原に固有の構成種は貧栄養立地を好むことから刈り取った植物体は、その場から取り除かれることが望ましい。 なお、初期整備としてササ等の伐採・搬出、ツル切りを行った後、当初 2 ～ 3 年は年 1 回の夏刈りを行い、放置されていた間に堆積した枯草等により富栄養化した土壌を、ススキ草原に固有の構成種が好む貧栄養化へ誘導する必要がある。 冬枯れのススキ株は昆虫の越冬場所となっているため、刈り取り等の管理作業の実施にあたっては、一区画の刈り残しや地際から数十 cm 程度から刈り取るなど、生物への影響をできるだけ回避する必要がある	
景観緑地と里山の保全ゾーン	同上

【現況写真】



No.21 畑地雑草群落		
植生調査地点	14	
高さ	0.4 m	
主な植物	高木層	-
	亜高木層	-
	低木層	-
	草本層	サツマイモ、インゲンマメ、パセリ、スベリヒユ、カタバミ、クワクサ、オヒシバ、ハキダメギク、イヌビユ、ザクロソウ、カヤツリグサ
出現種数	15.7	
起源	多種類の蔬菜類が栽培され、作物の間には、1・2 年草、小型多年草の畑地雑草が疎生する。	
調査地内における分布	南側や西側の民家の周辺や、清水谷戸の一帯に広がる。 【分布するゾーン】 源流の森と里山の保全ゾーン 里山の保全ゾーン 里山再生ゾーン 里山再生ゾーン（水田・湿地再生エリア） 景観緑地と里山の保全ゾーン	
資源性	【植生の見所・魅力】： カタバミ（開花期：3～9 月）、ハキダメギク（4～10）、ザクロソウ（7～10）など、春から秋にかけて小さなつつましい花を咲かせる種が多い。 【動物の生息環境の特性】： 爬虫類、林縁性・草地性のチョウ類、林縁性・草地性の昆虫類が多く生息する環境であると考えられる。（鎌倉市自然環境調査より） ハビタットとしてよく利用する生物：ショウリョウバッタ、カナヘビ、キセキレイ、アオジ（冬鳥）、ノウサギ、タイワンリス、タヌキ、イタチ ハビタットとして特に必要な生物：モンシロチョウ、モグラ（鎌倉市自然環境調査より）	
問題点	特になし	

管理手法	
源流の森と里山の保全ゾーン	低茎草地（ヨモギ等）などの多様な草地として再生を図る。
里山の保全ゾーン	同上
里山再生ゾーン	小学校の耕作体験としての畑地の利用を継続しながら、段々畑状のエリアの一部は初期整備として全刈り、低木伐採、搬出後、作物や苗木の畑、土手等を低茎草地（ヨモギ等）として活用する。
里山再生ゾーン （水田・湿地再生エリア）	小学校の耕作体験としての水田の利用を継承し、その他は水環境を改善しながら水田や多様な湿生草地としての再生を図る。
景観緑地と里山の保全ゾーン	茅場（カヤマ）として利用されていた箇所は、一部を高茎草地（ススキ等）として維持し、眺望も楽しめる広場利用を図る。 その他の畑等は、多様な草地のほか苗木等の畑として活用を検討する。

【現況写真】



植生調査地点 14